

総務文教常任委員会

所管事務調査報告書

平成30年11月30日

名寄市議会議長 黒井 徹 様

総務文教常任委員会

委員長 東 千春

副委員長 高野 美枝子

委員 佐藤 靖

山田 典幸

野田 三樹也

山崎 真由美

あす 未来を拓く「知」の館

～市立名寄図書館の将来像について～

はじめに

市立名寄図書館は昭和45年に建築され老朽化が著しい状況にあります。老朽化は建物の危険度はもとより、図書館が市民生活に果たす役割の変化に施設が適応しない面でも老朽化と呼べるのではないかと思います。市民から新たな図書館建設を期待する声と共に、必要性について疑問を抱く声も聞かれ、単に施設の老朽化に伴う建て替えではなく、図書館が市民生活に何を提供することができるのかを、多くの市民議論の中から明らかにしてその方向性を決めることが望まれるのではないかと思います。

当委員会ではこれまでの3年間で北海道内外、8箇所の図書館施設等の視察研修や、さらには各党派での視察内容の情報交換、書籍等での調査を進めてきました。この報告書はそのまとめとするもので、名寄市の今後の市立図書館建設に関して結論付けたものではなく、今後の議論の参考となることを願うものであります。

調査研究の経過

- 平成28年8月22日 札幌市 一般社団法人 北海道ブックシェアリング
- 8月24日 北斗市 北斗市総合文化センター「かなでーる」
- 平成29年7月11日 和歌山県岩出市 岩出市立岩出図書館
- 7月13日 岡山県瀬戸内市 瀬戸内市民図書館
- 7月13日 兵庫県赤穂市 赤穂市立図書館
- 7月14日 兵庫県明石市 あかし市民図書館
- 平成30年7月 3日 釧路市 釧路市中央図書館
- 7月 4日 幕別町 幕別町図書館
- 7月12日～11月30日まで計10回の図書館に関する委員会開催

視察先等の概要

- ・一般社団法人 北海道ブックシェアリング
北海道内の書店や図書館の現状について、新たな図書館計画に携わった経験から基本理念とコンセプトの大切さを伺いました。
- ・北斗市総合文化センター「かなでーる」
図書館、ホール、公民館の3つの機能を持つ複合施設。演奏会等の待ち時間の利用者もあり、市の中心部からは離れていますが文化ゾーンとして整備されています。
- ・和歌山県岩出市 岩出市立岩出図書館
「市民の身近にあって、いつでもどこでもだれでも図書館サービスを受けられるように

分館・分室のネットワークにより地域密着の運営を図る」を基本理念としています。「自然に恵まれた環境」「静かで読書や学習にふさわしい」「駐車場が広い」「紀州材を利用し木のぬくもりを感じる図書館」「児童スペースの充実」「ねごろ歴史の丘、文化文教ゾーンでの連携」を特徴としています。

・瀬戸内市民図書館

基本理念の「もちより・みつけ・わけあう広場」から、愛称を「もみわ広場」と名付け、基本理念を実現するための7つの指針を①市民が夢を語り、可能性を広げる広場、②コミュニティづくりに役立つ広場③子どもの育成を支え子育てを応援する広場④高齢者の輝きを大切にする広場⑤文化・芸術との出会いを生む広場⑥すべての人の居場所としての広場⑦瀬戸内市の魅力を発見し、発信する広場としています。

建設に当たっては新図書館整備検討プロジェクトチームを発足。市民からの要望として①情報公開②建設までのプロセスへの市民参画③経験ある人材の登用があり、市民ワークショップ「としょかん未来ミーティング」を開催し市民意見を計画に反映させています。

・赤穂市立図書館

基本理念を①光あふれるパークライブラリーとして、「忠臣蔵に代表される元禄ロマンの和、城下町のたたずまいのT字、L字構成、塩田の陽光・風などをイメージして赤穂らしさを表現し、広場の木々と一体となり訪れる人々に安らぎを与える②学び、楽しみ、くつろぐ図書館として様々なスペースを配置③21世紀の赤穂市の文化情報発信拠点としています。書架をはじめとした家具を中心にインテリアデザイナーとの協働によりカフェのように居心地の良いスタイリッシュな空間を持つなど、「日本の最も美しい図書館」に選定されています。

・あかし市民図書館

駅前再開発ビル内に商業施設と共に複合施設として建設され、4階にあかし市民図書館、他の公共施設として5階にあかし子ども広場・子育て支援センター・一時保育ルーム、6階にこども健康センター、あかし総合窓口があります。開館して間が無いため詳細なデータはありませんでしたが、相乗効果はあるのではないかとのことでした。運営は指定管理で、建物の設計段階から利用者への利便性向上について意見交換を行っています。また指定管理者として明石の歴史や文化を知る人と連携し地域情報の発信サービスを行っています。

・釧路市中央図書館

コンセプト、理念として①図書館機能の充実として・釧路らしい特徴を持つ図書館・利用者の利便性向上と資料管理の効率化・ICTを利用した情報拠点としての機能充実・レファレンス機能の充実・立地特性の活用・市民の図書館活動への参加促進②誰もが安全快適に利用できる図書館として・ユニバーサルデザインを取り入れる・利用の目的や方法を考慮した階層・若年層の利用促進と居場所づくりを考慮・親子で読書を楽しむ場の提供・

文字が見えにくい人でも読書を楽しめる・落ち着いた学べる学習室③ゆったりと利用を楽しめる図書館として・ゆったりと滞在し、落ち着いた学べ、くつろぎを楽しめる図書館・ラウンジの設置・閲覧スペースの充実が挙げられています。立地としては中心市街地の活性化、公共交通の利便性が良いことから市街地の民間ビル内に建設されました。運営は指定管理で行われており、①民間ノウハウを活かした利用サービスの向上②人的資源の整備③経費の合理的、効果的な運用によるコストダウンが期待できるとのことでした。

・幕別町図書館

基本コンセプトとして①ネットの力として、バーチャル本棚・ブログ型の情報発信と共有②人材の力として、本棚編集の自在性・地域情報の編集③本棚の力として、魅力ある独自の本棚構成・カメレオンコードを掲げています。応援団として7団体が参画し図書館をサポートしています。北の本棚事業は著名人から寄贈を受けた蔵書類を展示し、町民の文化意識の向上を目指しています。

・会派による視察

市民連合・凜風会では市役所内に設置し、利用増加につながった滝川市立図書館、市役所と隣接する複合施設として熊本県合志市の「ヴィーブル図書館」、市政クラブでは岩手県紫波町にある図書館を中心とした複合施設「おがーる」、建設の計画段階でしたが陸前高田市の商業施設との複合図書館などを視察し、その内容について委員間で情報交換を行いました。

これらの視察結果を委員会として評価し、名寄市の状況を踏まえながら将来の図書館についての基本的な考え方について議論を進めました。

市立名寄図書館の状況について

市立名寄図書館は昭和45年建設から築48年が経過し、これまでに年次的に修繕を行ってきましたが、耐震化テストは未実施。外壁の崩落、内部階段踊り場のひび割れ、雨漏りなどが発生しています。また、エレベーターが無く、車いすでの来館者には移動手段が確保されているとはいえない状況でバリアフリーに対応できていません。国際親善メモリーホールはこれまでの交流の記念品等が展示、保管されていますが一般利用は極めて少ない状況です。蔵書数の増加に伴うスペース不足から、児童書の一部や絵本が別スペースに配置されているほか、絵本の部屋は職員の目が届かず、不審者対策に適さない配置となっているなど、利用者の減少につながる状況にあります。

このような現状を踏まえ、図書館の将来のあり方について協議を始める時期に来ているものと考えます。

まとめとして

《建設に至る経過》

これまで視察した図書館のほとんどが老朽化により建て替えているものですが、建

設に至るまでの間に大変多くの市民議論を行い、その積み重ねから市民理解が得られているものとなっていました。これらの議論経過においてはコンセプトや基本理念をしっかりと据え、その方向に進む議論がなされたものと思います。

委員からの意見としてコンセプト形成を図るための議論経過を大切にしたい、図書館を核としたまちづくりも視野に入れたい、専門家の意見を聞く機会を設け市民議論を展開してほしいなどの意見が出され、幹となる考え方をしっかりと据えた議論展開が望ましいのではないかと考えます。

《人材》

視察先の傾向としては核となる人材がいる図書館は活動が活発でした。また、建設計画の市民議論の段階からノウハウのある経験者を登用して、市民ニーズやコンセプト形成まで時間をかけて多くの市民議論を経て建設に至った図書館が印象的でした。一方、指定管理では指定を受ける事業者が有効にノウハウを活かし地域に入って自主的に調査研究を行い、市民に還元する例もありましたが、本の購入が事業者ルートとなるなどの課題によって指定から外れる例もありました。一般職の職員も業務に精通した方が多く、これらの情報収集が必要だと感じました。

委員からの共通の意見として、志ある人材が不可欠で、ノウハウを持った人材の職員としての登用、指定管理も有用な人材の配置があれば有効、また、職員を育成するために先進的な図書館に事前に派遣して計画の進め方を含めて学ぶことがあってもよいのではとの意見も出されました。

《建設位置》

視察先における建設位置の条件や考え方は様々で、利用者の利便性を考慮した駅横複合施設などは、都市部の人の通行量を考えると有効な位置であること。また、街中の利便性を考慮した図書館では、バス交通の利便性は有効で買い物と合わせた利用が見込まれるものの、商店街の活性化にはあまりつながっていないことなどを伺いました。市街地から少し離れた図書館では駐車場スペースを広く取り、自然環境を楽しみながら、木陰で本を読むことができる環境が確保されており魅力の一つだと感じました。

委員から出された意見としては公共交通機関が整えば中心市街地から離れていてもよいのではないかと、子どもが一人で行くことができる環境が望ましい、市民、特に高齢者が余暇を過ごす憩える場所、子ども連れで買い物と合わせて行ける位置、市立総合病院の待ち時間を利用できる位置の可能性は、などの意見が出されました。

建設位置は大きな課題です。多くの市民議論から何を指すことが重要なのかコンセプトを明確化する中で、建設位置を決定することが望ましいと思います。

《複合施設》

近年は図書館と別の機能の公共施設や商業施設との組み合わせによる複合施設が見られます。他の施設との連携による相乗効果と立地適正化計画等を鑑み、施設の集約化を含めて学ぶことを目的として、何箇所か複合施設としての図書館を訪問しましたが、相互の往来や一部連携もありますが、密接な関わり合いはあまりありませんでした。各会派からの報告で紫波町は農村地帯で、採れる野菜を活用した料理のレシピ本を分かりやすく展示し、その本を借りて、隣にある産地直売店で地元野菜を買うなどの事例報告がありました。

委員からの意見として、教育委員会に関連する老朽化した児童クラブ「ほっと 21」等の施設との複合、保育所や子育てや中高生の学習支援など、子どもの健全育成に関連する複合、高齢者が憩うことができ健康に関連する複合、農業・家庭菜園と連携できる複合などの意見が出されましたが、どの分野においても学びながら物事を進めるために図書館機能はあらゆる可能性を包含できるのではないかと考えます。また立地適正化計画の推進や複合化による財源の捻出にも配慮し、身の丈を考慮した計画が必要ではないかと考えます。

《名寄市立大学図書館との関係性》

新たな図書館を検討する際に大学図書館との関係性について問われることがあるのではないかと思います。それぞれの役割と連携について協議することが望ましいと考え、大学との意見交換を行い議論を進めました。大学図書館は大学の設置基準に必要な施設であり、学生や教員の研究や学習に必要不可欠な施設です。従って蔵書目的は学科関連のものが中心となっていますが、市民の中にも大学と関連する職業や資格取得を目指す方等もおられることから、開かれた大学図書館として運営されています。また、市立図書館と検索機能が同じことから互いの蔵書検索が容易にできます。

委員からは役割分担の明確化や大学の試験期間の市民利用について、大学の夏休み期間の市民の積極利用について、新たな図書館では大学生の活動のフィールドとして活用できないか、市立図書館と大学図書館が連携した地域貢献を考えたいなどの意見が出されました。新たな図書館の検討が進められる中で、大学図書館及び大学との関係性も含めて議論していただきたいと思います。

《歴史と図書館》

視察先では、図書館の機能としてまちの歴史を研究して残し市民に伝える取り組みが見られました。あかし市民図書館では地域の歴史に詳しい人と連携しその情報を市民に還元する活動を進め、瀬戸内市民図書館では歴史的・文化的な価値を再認識するための地域・郷土資料の整備に努めています。赤穂市立図書館では忠臣蔵文庫を整備し歴史を伝えています。釧路市中央図書館では「文学館」を設置し釧路文学の歴史や関連資料を展示し

ています。岩出市立岩出図書館では市民から郷土資料の寄贈を募っています。

幸いに名寄市では北国博物館が歴史的資料を保管、展示し市民に伝える機能を担っています。このような活動は将来共に維持することが必要だと思いますが、図書館とも連携した地域の歴史・伝統・文化の伝承が望まれるのではないかと思います。

むすびに

先進地での視察等を通し、改めて確認できたことは「図書館」に対する基本的な考え方の変化でありました。

とにかく、図書館の実績評価として貸出冊数や利用人数を数字でのみ捉えがちですが、「図書館は無料貸本屋ではない。」「貸出冊数を競うのではなく、市民に何が提供できたのか。それこそが重要です。」の言葉に象徴されるように、知的探究心の開放、困りごとの解決、居場所の提供、コミュニティーの場など、市民の満足度を高めた結果としての数字でなければ意味をなさないことを再認識しました。

教育宣言都市を掲げる名寄市にとってふさわしい図書館像を描く時、既存の図書館機能に加え、中・高生への学習環境の提供や高齢者への憩いの場ともなり得る生涯学習環境の提供は重要であると考えます。

さらに独自の役割を分担しつつも、「情報」を扱う図書館と「モノ」を扱う博物館（北国博物館）が「郷土・地域・地元」に着目し情報とモノを活かす交流の場として連携することができれば、地域をよりプラス思考で展望する郷土学への次なるステップともなり得ることでしょう。

即ち、今求められている図書館は、市民に愛され親しまれる図書館であります。

図書館を核とした新たなコミュニティーが生まれ、やがては図書館が「ひとづくり・まちづくり」の核として市民の希望となることを切に願いつつ結びといたします。